

パスカル

『冥想録』に学ぶ

生き方の研究

渡部昇一

パスカル

『冥想録』に学ぶ

生き方の研究

渡部昇一

著者プロフィール

渡部昇一（わたなべ・しょういち）

昭和5（1930）年山形県生まれ。同30年上智大学大学院修士課程修了。ドイツ・ミュンスター大学、イギリス・オックスフォード大学に留学。Dr. phil., Dr. phil. h.c. 専攻は英語学。上智大学教授を経て、上智大学名誉教授。幅広い評論活動、著述活動を展開している。著書に専門書のほか『聖書』で人生修養』『南洲翁遺訓』を読む』『歴史に学ぶリーダーシップ』『知の愉しみ 知の力』『誇りなき国は滅ぶ』『いま大人に読ませたい本』『幸田露伴の語録に学ぶ自己修養法』『人間百歳自由自在』『運命を高めて生きる』『「仕事の達人」の哲学』『人生力が運を呼ぶ』『先知先哲に学ぶ人間学』『歴史は人を育てる』『財運はこうしてつかめ』『人生を創る言葉』『歴史の真実 日本の教訓』『子々孫々に語りつぎたい日本の歴史』（いずれも致知出版社刊）など多数。

パスカル『冥想録』に学ぶ生き方の研究

平成十八年四月六日第一刷発行

著者 渡部昇一

発行者 藤尾秀昭

発行所 致知出版社

〒107-0062 東京都港区南青山六の二の二十三

TEL (〇三) 三四〇九一五六三二

印刷・製本 中央精版印刷

落丁・乱丁はお取替え致します。

（検印廃止）

©Shoichi Watanabe 2006 Printed in Japan

ISBN4-88474-740-2 C0095

ホームページ <http://www.chichi.co.jp>

Eメール books@chichi.co.jp

パスカル『冥想録』に学ぶ生き方の研究 ● 目次

序論——今、なぜパスカルか

「クオリア」を認識していたパスカル 10

パスカルとの出会い 12

『冥想録』^{パンセ}の成り立ち 19

第一章——科学の外にあるもう一つの世界

幾何学的な精神と繊細なる精神 26

二河白道を歩む 30

時間が遅く過ぎる人、速く過ぎる人 35

知識は悲しみを慰めてくれない 40

自然は敵か、学ぶべきものか 42

極小と極大の間に生きる人間 45

精神と肉体が結合する瞬間

52

第二章——なぜ神が存在しないといえるのか

パスカルの体験した奇蹟

58

信仰が薄れたとき奇蹟は起こる

62

神は隠れている

66

なぜ神がいるほうに賭けないのか

72

霊感を習慣によって定着させる

77

理性ではなく心情で直感する

83

第三章——確かなものはどこにあるか

確信があれば腹は立たない

92

想像力の大きな力

99

外見は人の判断を誤らせる 103

人は本質ではなく特質を愛する 107

判断ミスを招くものになる病気と利害関係 109

正義とは状況次第で変わるもの 112

なぜ悪い予言は当たるのか 117

力のあるものが強いものになる論理 121

第四章——人間は考える葦である

◇人間の本質

人間は真実を語りたがらない 130

誰もがみんな虚栄心を持っている 134

徳に倣うは難く、悪徳に染まるは易し 137

徳は日常の中で磨かれる 139

邪悪の中から最高のものが生まれる 140

物事の三つの秩序

142

過去と未来に生きる人に幸せはない

143

◇気晴らしの効用

目的のない休息は死に等しい

146

気晴らしなしに生きてはいけない

148

底知れぬ不安が気晴らしを求め

152

◇習慣と偶然

天性とは習慣である

157

小さなことで大きなことが動く

161

習慣は習慣であるという理由で従うべきである

166

ローとレジスレーション

171

◇考える章としての人間

人間は考えるためにつくられている

174

思考の中に偉大さがある

176

思考の限界

182

◇ 人生雑感

時はすべてを癒す 184

夢の中の人生 186

人間の根本は変わらない 188

苦悩に負けるのは恥ではない 189

多様な価値が民主主義を育てる 190

第五章 —— 神は決して公平ではない

なぜ真実を告げることができないのか 196

原罪を背負って生きるべき人間 199

「我」は憎むべきものである 203

殉教の思想と全体主義 205

全体と個はいかにかかわるか 209

聖体とは何か 211

神は公平ではない 215

「煉獄」と「本地垂迹説」の発明 218

ユダヤ人と日本人の共通性 224

奇蹟を信じる人、奇蹟を笑う人 226

キリストとマホメット 230

外的な幸福から内的な幸福へ 233

パラドックスとしてのイエス・キリスト 235

十二人の詐欺師 239

聖書の預言と奇蹟 240

カレルガルドで見た奇蹟 244

信仰とはパラドックスである 248

細部へのこだわりが全体を見失わせる 251

終章——パスカルの思想を生きる意味

繊細なる精神がもたらしたパスカルの深さ

256

パスカルの現代的意味

259

あとがき

261

装　　幀——松吉　太郎
編集協力——柏木　孝之

序論

—
今、なぜパスカルか

「クオリア」を認識していたパスカル

最近、認知学という言葉をいろいろな分野で聞くようになった。哲学ならば認知哲学、言語学では認知言語学というような言い方が出てきている。その詳細を見れば、抜本的に新しい考えを述べているわけではないが、人の注目を今まで向けられていない方向にもう一度向けているという点では新しい意味があるといえるかもしれない。

では、認知学とはどういうものであるのか。わかりやすい例で表現するならば、次のようになるだろう。

現在、自然科学あるいは外科医療の発達によって、脳の血流が非常に精密に計れるようになってきている。たとえば、速読をすると脳のどのあたりでどのぐらい血流が盛んになるかが的確に把握できるそうである。しかし一方で、読んだ本が童話であるのか、バイブルであるのか、お経であるのか、あるいはポルノであるのかについてはさっぱりわからない。また、読んでいる人が悲しんでいるのか、楽しんでいるのかもわからない。

これはつまり、自然科学も進めば進むほど、わからない分野がはつきりするようになってきた、という意味である。血液の精密なる量の計測は、疑いもなく自然科学の発達による業績である。しかし同時に、自然科学の発達は「何がわからないのか」も非常に明瞭に示すようになったのである。

この「わからないもの」のことを、最近の学問では「クオリア (qualia)」という言葉で表現している。「クオリア」はラテン語の「クオリス (qualis どんな種類の)」という形容詞から派生した複数普通名詞で、要するに英語の「クオリティ (quality)」の複数形、つまり「クオリティーズ (qualities)」とほぼ同じ意味である。ただし、新しい概念であるため、「クオリア」という新しい言葉を使って表現しているようである。

もともとクオリアの単数形クオリー (quale) は、イギリスでは哲学・神学の用語として十七世紀後半から使われてきている。意味は「物の」性質である。英語で哲学术語にラテン語を使うのはありふれたことである。Quid (= what 「何」) に対して、その性質 quale (what kind 「どんな」) と対立させるのは珍しくなかった。現代においてその quale を複数にして qualia としたところが認知学の新しいところだ

が、本質的には新しい考え方というわけでも新発見というわけでもないのである。

私が若い学者たちと一緒に取り組んでいる研究会で、数年前、このクオリアの精神を説明する機会を得た。そのとき私は「クオリアの精神を考えると、パスカルの『繊細なる精神』に戻れ、という意味である」というような説明をした。

パスカルは人間の精神を「幾何学的精神」(レスプリ・ド・ジエオミトリック／*l'esprit géométrique*)と、「繊細なる精神」(レスプリ・ド・フィネス／*l'esprit de finesse*)の二つに分けた。幾何学的精神とは、わかりやすくいえば自然科学の精神のことだが、パスカルはこのほかにもう一つ別の精神の把握の仕方があるのだというのである。それが「繊細なる精神」であり、今、クオリアと表現されるものであると理解できるのではないか——そう私は考えた。それゆえ、その研究会でクオリアについて話すとき、私はパスカルを持ち出したのである。

パスカルとの出会い

この私の考え方は間違っていないと思っっているが、その正しさを裏付けるような出

来事が二〇〇五年に起こった。全く偶然に、この年、二つの医者（Alexis Carrel）の学会から基調講演を依頼されるといふ妙なことがあった。私はもちろん医者ではないので、なぜ医者（Alexis Carrel）の集まる席に招かれたのかと不思議に思ったのだが、どうやらそれは、私がアレキシス・カレル（Alexis Carrel、フランスではアレキシイ・カレル、アメリカではアレキシス・キャレルとも呼ばれる。両方を混ぜてアレキシイ・キャレルという人もいる）の『人間、この未知なるもの』の翻訳者であるという理由らしいとわかった。

そこで、せっかく医者（Alexis Carrel）の集まりで講演するのだからカレルを読み直そうと思い、『人間、この未知なるもの』の何回目かの読み直しを行い、また『ルルドへの旅・祈り』（中村弓子訳、春秋社刊、昭和五十八年）なども読み直した。すると驚いたことに、そこに「我々はデカルトに従い、パスカルを捨てた」というような内容の文章を見つけた。早速原典に当たってみたところ、「我々はデカルトに従い、パスカルを捨てた（Nous suivons Descartes, et délaissons Pascal.）」と書かれていた。（Alexis Carrel, *Reflexions sur la conduite de la vie, suivi de La priere*. Librairie Plcn, 1944 & 1950, p.295）

私がカレルの本を初めて読んでから、すでに何十年も経つ。翻訳をしたのは二十年

も前の話である。カレルの本を丹念に読んでいるとき、当然この部分も読んでいたと思われるが、それはもう記憶の奥深くに沈んでしまい、すっかり忘れてしまっていたところが、数年前に認知学について話したときに、私は「これはパスカルの復活である」というようなことを口にしていた。おそらくは頭の隅に残っていたカレルの指摘が無意識に甦よみがえったのではないかと思うのである。

カレルのこの文章を目にし、私は再びパスカルに戻ってみようと考えた。私が初めてパスカルの『冥想録』を読み終えたのは一九五〇年（昭和二十五年）三月五日の十二時四十分のことであった。これは本の巻末に書き込んだものであるので間違いない。したがって、実に五十五年も前に読んだことになるが、そのときの私の感激は非常に大きなものであった。巻末には読了の日時に続けて、次のような記述がある。

「一九五〇年三月五日、上智大学文学部英文科一年生としての学期末試験終了の翌日、帰省を前にしてカマボコ第四寮の自室にて十二時四十分読了す。本日は天気快晴。これより昼寝せんとす。

パスカルは羨しき程明晰なる頭脳の所有者である。特に感心した部分は、巻末の